

Title	ダーラム事始め：日本の国際化によせて
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	仲, 康(Naka, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.63- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ダーラム事始め

—日本の国際化によせて—

名誉教授 仲 康

昭和 61 年 3 月、私は選択定年制を適用して頂いて、母校慶應義塾大学文学部の教壇を去った。齢 60 歳であった。

三田の山を下りに当って、最も感激したことの一つは、新研の 220 号室にあった私物（主に書籍）、ダンボールにして約 80 箱分の移送の手続き、諸費用のすべてを、塾が負担してくれたことであった。私が管財に使用済みのダンボールを求めたとき、新品のダンボール 80 数個分を早速研究室まで管財の方が届けてくれたし、塾出入りの「東京通運」を紹介してくれ、「九州でも北海道でも、どこでも指定の所へお届けします。輸送費は塾負担です。永年勤めて頂いた方への、ささやかなプレゼントです」。管財の方のこの温き言葉に涙の出る思いであった。5 年たった今でも、この感激を忘れることはできない。三田山上は温情溢れる場で、こんな居心地の良き所は、日本全国どこへ行っても見当らないであろう。私はそう思っている。

私はいまイングランドの東北部の小さな町（人口、約 85,000）、ダーラム（Durham, ロンドン北方約 406 km, ニュー・キャッスルの南方、車で 15 分位のところ）へ 1 年の滞在予定で単身赴任している。ダーラムは日本では殆んど知られていないが、ケンブリッジ、オックスフォード両大学とならぶ名門ダーラム大学が市中の大半の地を占め、11 世紀に建てられたカテドラル、ダーラム城と共に、U.K (United Kingdom) での一大観光地の一つとなっている。従って夏のヴァカンスには、イングランド南部の人々が涼と観光を求めて、多数訪れてくる名所である。

ダーラム大学は 14 の Colleges と 2 つの Societies から成っており、

ダーラム事始め

各 College と Society は、200～400 人の学生 (若干の大学院生を含む) の居住する「学寮」を意味している。居住施設は完備しており、夏期休暇中は、先にあげた観光客や随時開催される諸会合、会議への参加者達の宿泊所となる。6 月末の年度おさめの期末試験が終了すると、居住していた学生達 (第 1 学年生～第 3 学年生) は一斉に帰郷するから、これらの「学寮」は一大ホテルと化するのである。宿泊費は市中のいくつかのホテルのそれに比して格段に安いし、料理はまさるとも劣らぬ程旨い。

いま私が勤務している帝京大学 (在八王子市) は、ダーラム大学と長期の契約を結んで、2 つの学生寮、1 つの教職員宿舎、校舎を、それぞれ同大学キャンパス内に建設した。そして今年の 4 月から、帝京大学文学部史学科、社会学科、国際文化学科第 2 学年生、計 111 名 (女子 70 名、男子 41 名) を 1 年間の滞在で派遣し、英語の研修を中心として、第 3 学年生として必要な諸単位の修得を、それぞれの学科の学則に従って履習させている。

100 余名の学生と若干数の教職員は、上記の 14 Colleges の内の 6 つの Colleges に所属して、朝・昼・晩の給食を受けている。というのはわれわれの「学寮」2 つには正規の給食施設が当初から計画されていなかったからである。俗な言葉でいえば、「飯場を持たない」2 つの「学寮」であるから、日本人学生達はいずれかの College の食堂を利用するしかない。けれどもこの方式は 3 食の短い時間ではあるけれども、ダーラム大学の学期開催中は、各 College のイギリス人を中心とした外国人学生達と交流する機会を持つわけだから、生きた英語の習得、英国人の行動・思考・感得の諸様式を肌で感じる、という大きな利点がある。

私はトロヴェリアン・カレッジ (もともと女子のみの「学寮」であったが、今年の 10 月、新学期から男子 50 名を寄宿させることになった) に、帝京の女子学生 11 名と共に給食を受けることになった。各カレッジには、Senior Common Room (S.C.R.) と Junior Common Room (J.C.R.) があり、教員である私は S.C.R. のメンバーとして、名誉ある資格と権利を

付与されている。Principal (校長) とよばれる Miss Deborah LAVIN の指揮の下で、常時 20~30 名の S.C.R. のメンバー (この中には TUTOR とよばれる指導教員が含まれる)、と J.C.R. のメンバーの役員が密接に連絡をとりながら、カレッジ・ライフが円滑に運営されてゆくようになっていく。社会学的にみて、実にうまい仕組みになっている。

ダーラム市は北海にそそぐウイア川の懐に全く抱かれた小さな静かな町であり、ここに 1 年間住む私の信条は:

When in Durham, do as the Durhamians do.

While there is laugh, there is life, and while there is life, there is hope.

DISCE UT PRAESTES, et il faut être toujours woderste pour apprendre.

ダーラム (イングランド) にて, 1990年 9 月22日記